

審査の結果の要旨

氏名 鄭 淳 英

この研究は、朝鮮植民地期に開催された博覧会の研究を通じて、韓国の近代建築を再証明することを目的とした。博覧会は様々な要素から成り立っているが、当研究では、博覧会の建築的側面、つまり都市における博覧会場の意味、パビリオンの建築様式、近代市民の空間、最後に植民地朝鮮の建築界と韓国人建築家像の五つの観点から分析を試みた。

第一章では、韓国の開港から植民地期の全期間にわたる博覧会の変容を分析した。

第二章では、博覧会場を対象にして、博覧会の国家プロジェクトとしての性格を抽出することを目的とした。東京の代表的博覧会場であった上野の森と朝鮮の景福宮との場所的意味を比較して、旧・新時代のヘゲモニー転換を表象した場として博覧会場を分析した。江戸時代の徳川幕府の象徴であった上野の森が、明治政府によって博覧会場になったことと、景福宮は朝鮮王朝の王権を象徴してきたが朝鮮総督府によって博覧会場になった過程を比較・分析し、博覧会場はヘゲモニーの宣伝をする「場」としての性質を持っていることが明らかにした。

第三章では、博覧会パビリオンの建築様式に焦点をおき、その意味を探った。パビリオンの様式は、海外博覧会向けと国内博覧会向けで大別することができ、対外向け（海外の万博）のパビリオンは、地域性に基盤を置いたバナキューラな様式を、国内向けには未来への志向性を表現した当時の新様式を選択した。朝鮮博覧会におけるテーマ館のパビリオンには、設営コストは高いものの現地の材料技術等を多用した朝鮮方式が採用された。これは、主として外国の来場者に朝鮮の博覧会であることを印象づけることを目的としたもので、博覧会テーマ館の一般的特性である近代性を排除し、地域性を強調表現したと考えられる。

第四章では、女性と子ども等社会的弱者と博覧会との関係に焦点をあて、彼らが近代化にどのように組み入れられたかを探った。日本では早くから女性と子どもをテーマとした博覧会がはじまったが、植民地朝鮮では、初期の共進会だけが家庭をテーマとした展示部分を併設し、以降は全く取り上げられなかった。1911年に日本で公布された、女性と子どもの労働時間を制限する工場法は、男性は社会で女性は家庭での役割分担を促すもので、博覧会でも家庭がテーマとして多く取り上げられた。一方、植民地朝鮮ではそのような工場法は施行されず、女性は安い労働力と期待されたこともあり、理想的な家庭のモデルを提示される環境はなく、従って家庭博覧会が開かれる必要性もなかった。朝鮮博覧会には妓生が出演するのがほぼ慣例で、これは朝鮮の働く女性像について

誤った認識を生むことにもなった。こどもの場合は、総合博覧会に付設して「こどもの国」という施設が作られ、娯楽や遊戯の常設施設がなかった植民地下の子どもにこどもらしい近代的な配慮が与えられた。

第五章では、韓国における博覧会のパビリオンなど設営に活躍した植民地建築界について、1921年に結成された朝鮮建築会を中心に考察した。朝鮮建築会は創設当初から、植民地朝鮮の住宅問題を論議しており、朝鮮博覧会の開催企画段階から住宅作品の出品ができるように働きかけた。また、出品住宅委員会を組織して、日本の理想的住宅案を受け入れる一方、冬の酷寒などの韓国の特殊性に対応した、中流向けの住宅を出品した。しかし、出品住宅は先進技術を基にした近代住宅のモデルとしては認められるが、工事が高くなり本来の趣旨の中流向けの提案としては成功しなかった。

最後の第六章では、韓国人建築家の朴吉龍を中心に博覧会が朴に与えた影響を分析した。朴は博覧会委員に選ばれ、朝鮮式パビリオンの設計に関与した。総督府技手の当時、洋風設計が主流だったが、博覧会以降は、韓屋の改良案を提案し実際に改良した韓屋の設計を行うなど、自らの文化を肯定的に受けとめ実現に努めた。植民地建築界をリードする日本人建築家にも、朴の活動は評価された。後に朝鮮建築会の理事になり、植民地下のリーダー建築家の一人になった。

マスコミが台頭する前の時代において、博覧会は非常に効果的なメディアであり、人々を啓蒙したり、国家政策や企業を宣伝したりした場として機能した。この研究は、植民地朝鮮の博覧会を通して博覧会のメディア的性質を究明する一方、韓国人建築家自らの力で近代化を目指す動きがあったことなど、当時の建築的実状を再構成することができた。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。